3年B組
金八先生

青春の坂道

小山内美江子

高校生文化研究

3年B組
金八先生

青春の坂道

小山内美江子

高校生文化研究会

小山内美江子（おさない・みえこ）
1930年，横浜に生まれる。シナリオ作家。代表作に「加奈子」「マー姉ちゃん」「本日は晴天なり」「父母の誤算」「親と子の誤算」など。著書に『十五歳の愛』ほか金八先生シリーズ（高文研），『母と子の旅立ち』『母と子の金八先生への道』（労働旬報社），『すばらしき遭難』（旺文社）などがある。日本シナリオ作家協会，日本放送作家協会会員。

3年B組金八先生　青春の坂道

一九八二年　九月二五日――――第一刷発行

★定価八〇〇円

著　者／小山内美江子
発行所／高校生文化研究会
東京都千代田区猿楽町二―一―八
三恵ビル内（〒101）
電話　03＝295＝3415
振替口座番号　東京6＝18956

印刷・製本／凸版印刷株式会社

★乱丁・落丁本については、送料当方負担でお取りかえいたします。

©M.Osanai. *printed in Japan.* 1982 0093-30006-2471

人生には、たくさんの坂道がある。
中でもとりわけ、青春の坂道はきびしい。
時にそれは、崖かと見まがうほどに険しく、
また時に、気が遠くなるほど幾重にも折れ曲がって、
若者の行く手に立ちふさがる。
それでも、人は、
その坂道を越えていかなくてはならない。
なぜなら、それが、生きるということだから——。

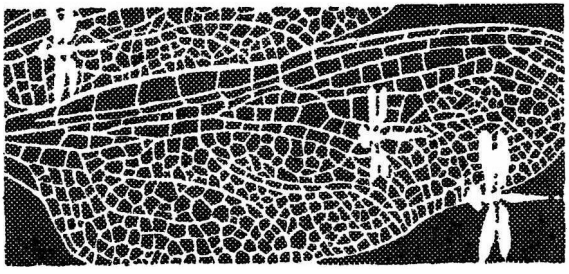
もくじ

Ⅰ 三年目の秋 5

Ⅱ 金八先生の結婚 21

Ⅲ それぞれの道 51

Ⅳ 同窓会なんかやめちまえ 79



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

V 迷う十八歳 115
VI 戦争の足音 155
VII 今日の日を忘れるな 183
あとがき 223

カバー・扉＝絵　勝又　進

章扉写真　TBS提供

I　三年目の秋

日の暮れかかった下町の商店街は活気にあふれていた。狭い通りは買い物袋をさげた主婦たちや家路を急ぐ人たちで混雑し、店先からは客を呼び込む威勢のいい声がとびかう。

その雑踏の中へいま、一台の乗用車が押し入ってきた。けたたましいクラクションの響きに、人々が非難の目でふりかえる。

「コラッ！　危ないじゃないかッ！」

跳びのいて大声をあげたのは、金八先生である。そのひょうしに、金八先生が両手にかかえていた紙袋から、キャベツや玉ネギが路上にころがり落ち、卵が音をたてて割れた。

「チェッ！　あァ、あァ」

舌打ちしたあと、情けない声をあげた金八先生は、あわてて散らばった野菜をひろいはじめた。

「アラ、先生！」

快活な声に金八先生が振り仰ぐと、黄色いセーターを着た若い娘が立っていた。三年前、金八先生が世田谷の中学から、ここ下町の桜中学に転任してきたとたん、妊娠事件を起こして金八先生を仰天させた浅井雪乃である。

「毎日、買い物で大変ですね、先生も」

雪乃が、いっしょに玉ネギをひろいながらいくぶん冷やかすように言った。

「ん？　ま、まァな。どうだ、歩くん、元気か？　大きくなったろうね」
「ハイ、もう、ちょっと目を離すとすぐ表へ飛び出しちゃうって、母がこぼしてます」
金八先生が桜中学に転任してきてから、はや三年が過ぎた。それこそアッという間のことであったが、歩の成長だけでなく、それぞれの成長が、三年という月日を物語っていた。雪乃は、あれから将来を誓いあった宮沢保の父の設計事務所に勤めながら、定時制高校へ通っている。雪乃だけでなく、桜中学の元三年B組の生徒たちのほとんどが、いま、高校三年の秋を迎えていた。
三年前、高校受験へ向かってきびしい風の吹く道を歩いていた三年B組の生徒たちは、いままた、大学入試や就職試験を前にして、不安と期待の交錯するなかを歩いているにちがいない。が、新たなクラスと問題のある生徒をかかえている金八先生には、三年前と同じようにあのときの一人ひとりの生徒たちとかかわっていく時間も余裕もなかった。いまはただ、それぞれが自分の力で試練を切り抜けていってくれるよう願うだけである。
「浅井、宮沢も大学受験、もうじきだね。やっぱり、国立ねらうのか？」
「さあ、どうでしょうか」
「どうでしょうかって、話し合ってないのか、お前たち」
「別に、いいんです」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

「いい？　何がいいんだ。宮沢の将来は、お前の将来でもあるんだぞ」
「それより、先生」
「待て待て、いいか浅井」
しかし雪乃は、金八先生に背を向け、玉ネギをひろいつづけている。その話題にふれてほしくないらしい。保との間に、何かあったのだろうか。金八先生の胸に不安がこみあげてきた。
「会ってるんだろ？　宮沢には」
「あ、いけない。学校、おくれちゃう」
腕時計を見た雪乃は、最後の玉ネギをひろって金八先生に手渡し、立ち上がった。
「浅井、あのな」
「先生のとこも、もうじきですね」
「ん？」
「赤ちゃん」
雪乃がニコッと笑いかけると、それまで雪乃のことを心配していた金八先生の顔にも、何ともいえぬ笑みがひろがった。この三年の間に、生活に変化があったのは、生徒たちだけではない。金八先生自身にも、長い人生のうちで最も重大な変化が起こっていた。

金八先生は、一年前に結婚し、まもなく父親になろうとしていたのである。

最愛の妻が身ごもってから、買い物は、できるだけ金八先生がしている。商店街の雑踏の中を、腕いっぱいに買い物をかかえて、金八先生は家路を急ぐ。

《それにしても、浅井のやつ……》さっき別れた雪乃のことが、金八先生には妙に気にかかった。雪乃は、将来を約束し合ったはずの宮沢保が、どこの大学を受験しようとしているのかも、知らないと言う。それだけではない。保のことにふれられるのを避けるように、急に話題をそらしてしまった。保と雪乃の間に、何か、重大なことが起こったのであろうか。十五歳で、人の子の親になってしまった保と雪乃。将来結婚することを約束しているとはいえ、これから二人の気持ちがどのように変わっていくかは、誰にも予測はできない。いや、すでに、二人の心に深い亀裂が走りはじめているのかも……。《いや、そんなはずはない》金八先生は、あわてて不安を打ち消した。

金八先生が、商店街を通り抜けて、角を曲がろうとしたときである。懐かしい顔が、通りの向こうの喫茶店から出て来るのが見えた。九十九弥市である。

三年B組でいちばん背が高く、すぐカッとなる性格で、私立高校入試のときは試験場で他校の

生徒ととっくみあいをやらかすなど、さんざ金八先生をてこずらせた生徒だった。それだけに、都立の工業高校へ入れたときは、金八先生は思わず弥市と抱き合ったものだ。

弥市につづいて、二人の男が喫茶店から出てきた。一人は四十過ぎの実直そうな男。もう一人は、弥市と同じぐらいに背の高い三十そこそこの男で、短く刈りあげた髪の毛と、浅黒く日焼けした顔が、精悍さをいっそうきわだたせていた。

年配の実直そうな男が、弥一の肩に手を置いた。二人は弥一の連れだったらしい。通りを渡って弥一に近づきかけた金八先生は、足をとめた。

「とにかく、君のような人が、ぜひうちには必要なんだ」

年配の男の言葉を、弥市は直立不動の姿勢で聞いている。

「からだも頑丈そうだし、工業高校で勉強したことも、うちなら十分生かせる。昇進のチャンスだってうんとあるしね」

そう言うと、男は弥一の肩を二、三度、軽くたたいた。

《そうか……。弥市は就職するつもりなのか》金八先生は、連れの男たちがいなくなったら、弥市に声をかけるつもりで、買い物客の人ごみの中に立ち止まっていた。

「なんだったら、御両親には私たちからよく話してみようか」

「いえ、自分で選んだ道ですから、僕から」
弥市が、二人の男に頭を下げると、二人の男の顔に微笑が浮かび、こんどは若い方が弥市の肩をポンとたたいて、そのまま三人は並んで駅の方へ歩き始めた。
「金八っつぁん！」
二、三歩、弥市たちのあとを追いかけた金八先生の背に声をかけたのは、梅原明だった。
「オオ、梅原！」
明は、早く手に技術をつけようと、高校進学を断念して、自分の家の梅原工務店で大工仕事に励んでいた。
「お前、弥市のこと、何か聞いてないか？」
「弥市がどうかしたの？」
「いや、そういうわけじゃないんだが……今そこで見かけてね、どっかの会社の人と話してたみたいだから、就職、決まったのかと思って」
「ああ、あいつ、大学は行かないって言ってたけど」
「やっぱりそうか」
「あいつ、拳法、高校でもずっとやってたからね。それが生かせるようなとこ、就職するって」

「ほう……拳法ねえ」
拳法が生かせるような会社……。弥市は拳法のクラブでもあるような会社に就職するつもりなのだろうか。
「聞いてみれば？　同窓会、弥市も楽しみにしてたから」
「そういえば、もう同窓会の時期だなァ」
金八先生は、家庭のことと、二年生の担任としての忙しさで忘れていたが、あのときの三年B組は毎年一度、秋に同窓会をすることになっていたのだ。
「どう先生、ちょっと、飲ってこうか」
「ん？」
かつての生徒と共に盃を傾ける――それは金八先生の夢であったが、明はまだ十八だ。
「バカ、お前、まだ未成年じゃないか」
「だって、社会人だぜ」
「お前なァ」
「ま、いいや。先生と赤提灯行くの、二年先の楽しみにとっとくよ」
明の口ぶり、物腰には、他の生徒たちよりひと足早く社会人として歩み始めたたくましさのよ

うなものが感じられた。
「オレさ、先生に言われたこと、始めることにしたんだ」
「オレに言われたこと？」
「あれッ、覚えてないの？」
「ん？　な、なんだっけ」
「ホラ、言ったろ？　先生。大工だって、勉強、必要だって。で、一年くらいたったら定時制、行こうと思ってたけど、あのままになっちゃって」
「ああ、そうだったな」
「けどさ、やっぱり、仕事してみると、いろいろわかんないこと出てくるんだよね。だからさ、思いきって来年、定時制に行くことにしたんだ」
「そうか……うん、行くことにしたか」
金八先生は、うれしそうに目を細めた。三年間の高校生活を終えて、大学へ行く者、就職する者、そしてここに、三年間の仕事の中から、勉強の必要性をみずからつかんで、新たに勉強を始めようと決心した者もいたのである。
「そうか、棟梁(とうりょう)になるのも大変なんだな」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.